

《書評》ブーカン版ドリュ・ラ・ロシエル小説集

松尾, 剛
立命館大学法学部 : 教授

<https://doi.org/10.15017/7329818>

出版情報 : Stella. 43, pp.267-270, 2024-12-18. Société de Langue et Littérature Françaises de l' Université du Kyushu

バージョン :

権利関係 :



《書評》

ブーカン版ドリユ・ラ・ロシエル小説集

松 尾 剛

2012年のプレイアド叢書入りをきっかけに、ドリユ・ラ・ロシエル関連のドキュメントが陸続と公刊されたのは、本誌『ステラ』第40号掲載の拙稿でも報告したところであるが¹⁾、この潮流は途切れることなく今日に及び、2024年には『シュールレアリストへの手紙』がガリマール書店から出版された²⁾。これは「シュールレアリストたち真の過ち」に始まる3通の公開状を、その理解に不可欠な資料体を添えて刊行したもので、必ずしも未刊資料の発掘というわけではないが、ドリユと超現実主義者たちの交流と決別を理解するにあたって大変便利な一書となっている。

本稿で紹介するブーカン版『ドリユ・ラ・ロシエル小説集』もまた、この流れに倅差すものと理解していいだろう³⁾。編者はジュリアン・エルヴィエとフレデリック・サネン、それにステファヌ・ゲガンの3名である。斯界の第一人者ジュリアン・エルヴィエについては多言を要すまい。ドリユの文学作品を学術研究の対象として認知させた彼の功績は何人たりとも否定しえない。プレイアド版のみならず、ブーカン版の編集にも彼が携わっていることは至極当然であろう。またフレデリック・サネンは、ドリユの文学的軌跡を詳細に跡づけた好著『ドリユ・ラ・ロシエルとその作品』を刊行した人物であり、編者として名を連ねているのも宜なるかな⁴⁾。他方、ステファヌ・ゲガンは美術史家として知られた人物で、ドリユにかんする研究業績としてはこれが初めてのようであるが、本書への貢献からは作家にかんする並々ならぬ学識が窺える。

さて、本書刊行が2012年以降のいわばドリユ・リバイバルの一環であることは上述のとおりだが、じっさい収録タイトルを見れば、同書編纂にあたりプレイアド版が念頭に置かれていたことは一目瞭然。『女たちに覆われた男』『窓辺の女』『奇妙な旅』『ペルーキア』『馬上の男』『わらの犬』——これらの小説はすべてプレイアド版には採用されなかったものだ。ブーカン版がガリマール版著作集の向こうを張って企画されたことが推し量られよう。とまれ本書とブ

レイアッド版を併せ読めば、作家の小説作品ほぼすべてを把握できるようになったわけであるから、ドリュを読む者にとってこれに過ぎる喜びはない。

しかしながらブーカン版の編集方針はプレイアッド版のそれとは相当に異なっている。エルヴィエの巻頭言によれば、作品理解には伝記的・時代的コンテキストの知識が必須とはいえ、膨大な註記は読書の快楽を台無しにしかねない。そこで編者らは、それぞれの収録作品には簡略な紹介文を付すにとどめ、代わりに『ドリュ・ラ・ロシエル事典』を掉尾に配することで、作者の人と作品を理解するためのよすがとしたのである。

じつのところ、この『事典』こそがブーカン版最大の収穫だと筆者は考えている。これはドリュ研究に必須ともいえる 70 余りの項目を、およそ 140 頁にわたりアルファベット順に並べたもので、事典の名に相応しい構成が採られている。ドリュ周辺の文学者や政治家はもちろん、「金銭」や「鏡」、「ユダヤ人」や「自殺」など作家固有のテーマにも項が割かれ、これらに目を通せば文学者ドリュ・ラ・ロシエルの多面性が自ずと浮かび上がる仕組みだ。また本書が収録しなかった作品それぞれに項目が立てられているのは、この一冊でドリュの文業を一望できるようにとの心憎い配慮だろう。

だが作家に関心を寄せる者にとって何よりありがたいのは、ドリュと深く関わりながらも、歴史的・文学的には無名の人々にまで立項が及んでいることだ。少年ドリュを文芸に開眼させた後、大戦を待たずして早世したラウル・デュマや、作家が初めて強く愛した女性マルセル・ジャンニオのような人物にも項が立てられたおかげで、我々は作家の私的領域にまで考察を巡らすことができる。ここで実人生と創作行為の峻別を過度に主張するのはやめておこう。つねに私生活を小説の素材とし、倦むことなく自己を語り続けたドリュを考えるに際し、人と作品の分割はさしたる益をもたらさない。そもそもドリュに関心を向ける者の多くは文学作品のみならず、波乱に満ちた彼の人生行路にも興味を覚えているはずだ⁵⁾。したがってドリュの創作行為に直接的な影響を与えておらずとも、作家の生に多少なりとも関わった人物について詳述することは、単なる好事家趣味を超えて読者の熱い期待に応えるものなのである⁶⁾。

とはいえ 3 名の編者が作家の実人生の些事にかまけ、作品の読解をなおざりにしているなどと考えてはならない。それどころか 8 頁を超えぬ範囲で簡潔にまとめられた各作品の紹介文は、執筆時の時代背景や作者の置かれた状況を押

さえつつ、相当地踏み込んだ作品解釈を提示している。例を挙げれば、『女たちに覆われた男』が戦後フランスの風俗画にとどまらず、ドリユの自己探求を描いたものであることを示したフレデリック・サネンの解説や、『わらの犬』における〈ユダヤ〉の両義性を指摘したステファヌ・ゲガンのそれは、単なる紹介を超えて作品の深部に迫る勢いで示唆に富む⁷⁾。そもそも本書収載の小説群は、プレイアッド版の選から外れた作品であることから看取されるように、ドリユの文業においては比較的マイナーな地位に留めおかれた。そのため、かならずしも緻密な読解の対象となってこなかった憾みがある。であればこそ編者の手になる解説文は、研究言説としてなおさら貴重だ。本書刊行が『窓辺の女』など傍流作品の本格的研究の嚆矢となることを期待したい。

以上、駆け足ではあるがドリユ・ラ・ロシエルのブーカン版小説集を紹介した。思えば筆者がドリユに関心を持ち始めた90年代初頭は、彼のテキストを入手すること自体が難しく、とりわけ『ファシスト社会主義』のような政治評論にいたってはフランスの古書店頼みであった。それから30年あまり、ほとんどの小説作品がブーカンとプレイアッドという高名な文学叢書で読めるようになるとは、まさに隔世の感がある。

埒もない感慨はさておき、ドリユ・ラ・ロシエル研究の隆盛に伴って、今後の刊行が待ち望まれるのは、ベルーキアことクリスチアーヌ・ルノーに宛てられた書簡だろう。1935年に出会い、すぐさま恋に落ちた二人の間で交わされた手紙は、これまでもたびたび引用・言及されてきた。しかし最初の妻コレットとの往復書簡が出版されたように、できうるならばドリユとベルーキアの交流についても、第三者を介さずに直接に知りたいと願うのは、ひとり筆者のみではあるまい。もちろんルノー夫人は文学者ではなく一私人であり、また当然ながら私信の公開は周辺の人々にも少なからぬ影響をもたらす以上、容易なことでないのは承知している。それでもなおドリユが「私の人生で永らえることのできた唯一の女性」⁸⁾とまで形容する〈パリの女王〉との交情について深く知りたいと思うてしまうのは、研究者のあまりに過大な願望であろうか。

註

- 1) 拙稿「ドリユ・ラ・ロシエル『内面の手帳』」、『ステラ』第40号、九州大学フランス語フランス文学研究会、2021年12月、133-134頁を参照されたい。

- 2) Voir Pierre DRIEU LA ROCHELLE, *Trois lettres aux surréalistes*. Édition présentée et annotée par Bertrand LACARELLE, Paris : Gallimard, coll. «Les Cahiers de la NRF», 2024.
- 3) Voir Pierre DRIEU LA ROCHELLE, *Drôle de voyage et autres romans*, suivi du *Dictionnaire Drieu la Rochelle*. Édition établie par Stéphane GUÉGAN, Julien HERVIER et Frédéric SAENEN, Paris : Bouquins éd., coll. «Bouquins», 2023.
- 4) Voir Frédéric SAENEN, *Drieu la Rochelle face à son œuvre*, Gollion : Infolio, 2015.
- 5) たとえばドリユがレジスタンスに拉致されるという架空の設定に基づくジェラル・ケガンの〈寓話〉(Gérard GUÉGAN, *Tout a une fin, Drieu*, Paris : Gallimard, 2016) や、多分に空想を交えながらドリユの最晩年を描いたオード・テレイの著作 (Aude TERRAY, *Les Derniers jours de Drieu la Rochelle*, Paris : Bernard Grasset, 2016) などは、作家の実人生への強烈な関心無しには生まれえない〈物語〉である。
- 6) じつは『ドリユ・ラ・ロシエル事典』については、先例というべきものが存在する。それはジュリアン・エルヴィエが2018年に刊行したドリユ論である。「アルコール」から「女性同性愛」までの36項目をアルファベット順に論じた同書は、ドリユ小事典とも称しうる単行研究書であった。Voir Julien HERVIER, *Drieu la Rochelle. Une histoire de désamours*, Paris : Gallimard, 2018.
- 7) 『わらの犬』における〈ユダヤ〉の両義性にかんしては、筆者もかつて同様の問題を指摘・論究したことがある。拙稿「ドリユ・ラ・ロシエルの反ユダヤ主義」、『ステラ』第15号、九州大学フランス語フランス文学研究会、1996年7月、125-142頁を参照されたい。
- 8) 「ブルーキアはまったく別だ。私は彼女を情熱的に愛したし、今なお、ありったけの優しさで、優しい情熱でもって愛している。彼女は、感嘆すべき素直さのゆえに(それは夫君も最も評価する美点だ)、私の人生で永らえることのできた唯一の女性である」(Pierre DRIEU LA ROCHELLE, *Journal 1939-1945*. Édition établie, présentée et annotée par Julien HERVIER, Paris : Gallimard, coll. «Témoins», 1992, p. 111)。しかしながら、たとえ両者の往復書簡集の刊行が企図されたとしても、クリスチアースからの手紙の大部分は失われた可能性が高い。それというのもドリユの残した資料の多くは、まことに残念ながら1950年代半ば、火災により焼失してしまったからだ。じっさいコレットとの往復書簡にしても、収録アイテムのほとんどはドリユからの手紙で、コレットが作家に宛てたそれは下書きも含め12通ときわめて少ない(voir Pierre DRIEU LA ROCHELLE, *Correspondance avec André et Colette Jéramec*. Édition présentée par Gil TCHERNIA et Julien HERVIER, Paris : Gallimard, 1993)。